

共生社会特別委員会委員会調査報告書

令和7年11月21日（金）に、東京都スポーツ推進本部（有明テニスの森）において、次の事件について調査を実施したところ、その概要は別添のとおりでした。

【調査事件】

- ・ デフリンピック・パラスポーツの推進について

令和8年2月25日

神奈川県議会議長 長 田 進 治 様

共生社会特別委員会委員長 ます 晴太郎

1 調査の概要

(1) 調査日程

令和7年11月21日（金）

(2) 調査箇所

東京都スポーツ推進本部

（※ 説明は、有明テニスの森において聴取）

（有明テニスの森：東京都江東区有明2-2-22）

(3) 出席委員（計12名）

ます晴太郎委員長、野内みつえ副委員長、
小林武史、武田翔、田中信次、内田みほこ、土井りゅうすけ、原聡祐、森田学、
望月聖子、岸部都、亀井たかつぐの各委員

(4) 随行者

川瀬主事（議会局議事課）、小花主査（文化スポーツ観光局総務室）、
竹内副主幹（福祉子どもみらい局総務室）、宮下副主幹（教育局総務室）

(5) 行程

県庁～有明テニスの森～県庁

2 東京都スポーツ推進本部

(1) 調査目的

デフリンピックは、国際ろう者スポーツ委員会が主催するデフアスリートを対象とした国際大会である。

今回、東京で開催されたデフリンピックは、日本で初めて開催されるデフリンピックであり、また第1回大会開催から100周年に当たる節目の大会である。

大会の開催に当たり、東京都スポーツ推進本部と全日本ろうあ連盟が準備、運営を担っており、デフリンピック及びデフスポーツの機運醸成や共生社会の推進に取り組んでいる。

そこで、東京都スポーツ推進本部におけるデフリンピック開催に当たっての取組と、実際の大会の様子を調査することより、今後のデフリンピック・パラスポーツの推進についての委員会調査の参考に資するものとする。

(2) 調査先出席者

ア 東京都スポーツ推進本部出席者

スポーツ推進本部大会総合調整担当部長、国際スポーツ事業部大会総合調整課長
ほか

イ 文化スポーツ観光局出席者

松田剛志パラスポーツ推進室長

ウ 福祉子どもみらい局出席者

笠井熱史地域福祉課長、山下智樹障害福祉課長

(3) 委員長挨拶

(4) 東京都スポーツ推進本部大会総合調整担当部長挨拶

(5) 概要説明

次の内容等について、説明があった。

ア 東京2025デフリンピック大会概要

イ デフリンピックの準備・運営体制

ウ デフリンピック機運醸成の主な取組

(ア) 東京都の取組

(イ) 全日本ろうあ連盟の取組

エ 世界陸上・デフリンピックビジョン2025

(6) 質疑応答

質 疑 デフリンピックの目標観客数10万人を超えたというニュースを見たが、この目標観客数は何に基づいて算出したのか。

応 答 10万人をどう評価するというのはなかなか難しいが、競技会場のキャパシティが大きいものばかりではない。東京2025世界陸上だと60万人以上だが、そこまでいかない。しかし、なるべく観客席を埋めていきたいというところで、我々としては少し高い目標として10万人とした。

無料で観戦できるので皆様に来ていただきたいという思いもあり、いろいろな所で周知した結果、うれしい誤算が生じたと思う。

学校観戦で5万人、一般の観客5万人という想定をしていた。

質 疑 デフリンピックの開会式や閉会式の抽選に当たらなかったという声を聞いた。会場を何か所か見たところ一般席が少なく、スポンサー席が同じくらいか多い会場もあると思うが、座席の配分率を今からでも変えることはできないのか。

応 答 スポーツ文化事業団が運用しているため、今からどこまで運用を変えられるかは分からないが、できるだけ皆さんに見ていただけるようにしたい。

学校観戦の枠が入らなかったときに、そこに一般のお客様を入れられるような運用ができるように今頑張っているところである。



(7) 副委員長挨拶

(8) デフリンピック視察（テニス観戦及び会場視察）



(9) 調査結果

- 東京2025デフリンピックでは、次の三つの大会ビジョンを掲げているとのことであった。
 - ・ デフスポーツの魅力や価値を伝え、人々や社会とつなぐ
 - ・ 世界に、そして未来につながる大会へ
 - ・ “誰もが個性を活かし力を発揮できる” 共生社会の実現
- 今大会のエンブレムは人々のつながりを意味する「輪」をテーマにデフコミュニティーの代表的なシンボルである「手」を表したもので、学生がデザインし、都内の中高生による投票で決定されたとのことであった。

- 今大会で特徴のある競技や会場として、次のものがあるとのことであった。
 - ・ デフリンピックならではの競技として、ボウリングとオリエンテーリングがある。
 - ・ 特徴のある会場として、高速道路としての使用を停止している東京高速道路及び首都高速道路高速八重洲線の一部をマラソンコースとして活用している。
- 今大会の運営体制は次のとおりとのことであった。
 - ・ 主催は国際ろう者スポーツ委員会だが、日本に招致したのは全日本ろうあ連盟であり、開催権限を与えられている。
 - ・ 運営の主体は全日本ろうあ連盟だが、オリンピック・パラリンピックを開催した経験のある東京都と協定を締結し、準備・運営を分担している。
 - ・ 協定の下、デフリンピック運営委員会と東京都スポーツ文化事業団デフリンピック準備運営本部が実際の業務を行っている。
 - ・ 大会の準備・運営全てを担うのは難しく外部との連携も必要であることから、スポーツ庁、日本オリンピック委員会、日本パラスポーツ協会等から意見をもらう大会準備連携会議をつくり、連携を図っている。
- 東京都による機運醸成の取組として次のようなものがあるとのことであった。
 - ・ 令和5年度は大会を知ってもらうことに重点を置き、ウェブサイトやエンブレム作成のほか、応援アンバサダーによる魅力発信、子供たちが手話に触れるきっかけとすることを目的としたダンスである、しゅわしゅわデフリンピックの公開、デジタル技術により音声が見える化し、耳が聞こえる方、聞こえない方にかかわらず楽しめるカフェである、みるカフェやデフアスリート交流イベントを行った。
 - ・ 令和6年度は大会に参画してもらうことに重点を置き、切れ目のない機運醸成の取組として、大会マスコットと自治体キャラクターによる応援隊の結成や都内の小学校へのデフハンドブック配付と特別授業の実施、メダルデザインの投票、サインエールの開発を行った。
 - ・ さらに令和6年度はSNSを活用したPRやイベントでのPRブース出展、全国へのPRを行い、結果としてデフリンピックの都内認知度は令和6年度時点で14.8%から39.0%に上昇した。
 - ・ 令和7年度はサインエールの実証や普及、大会200日前イベントの実施、SusHi Tech Tokyo 2025におけるユニバーサルコミュニケーション技術のPRを行い、さらなる機運醸成に取り組んだ。
- 今後の取組として、サインエールを今後もデフスポーツ振興のツールとして使用してもらえよう精度向上に取り組むことや、カウントダウンモニュメントの巡回や会場のある福島県、静岡県との連携を引き続き行っていくとのことであった。
- 全日本ろうあ連盟は、大会の認知度向上及び機運醸成、手話言語や聾者の文化の発信、多様性と共生社会の推進、全国から選手への応援を届けることを目的として次のような全国キャラバン活動を行ったとのことであった。
 - ・ 全国82か所でイベントを開催し、デフスポーツの紹介やデフアスリート等に

よるトークショー、デフスポーツ体験、手話言語体験を行った。

- ・ 小中学校と聾学校を含む特別支援学校を対象に、学校からの依頼に基づきデフアスリート、手話言語指導講師等を派遣し体験学習を行った。
 - ・ 機運醸成のため、東京都を目指して日本の北と南から出発して全国を巡回したPRカーが、デフリンピックスクエアに展示されている。
- 東京都は同年に開催された世界陸上と合わせて両大会のレガシーを創出するためビジョン2025及びアクションブックを策定したとのことであった。
- ビジョン2025のコンセプトとして、東京2020大会のレガシーを継承・発展、両大会一体となってウェルネスの向上や社会変革を推進、2025年を機に東京に新たなレガシーを創出という3点を掲げているとのことであった。
- ビジョン2025では、さらに、みんながつながる、世界の人々が出会う、こどもたちが夢をみる、未来へつなぐ、みんなで創るという五つのテーマで次の10のアクションを定めているとのことであった。
- ・ みんながつながるでは、①大事な情報、伝える工夫②デジタルで拓く東京の未来、を掲げ、国際手話人材の育成や都内スポーツ施設のアクセシビリティ設備整備、公共施設へのユニバーサルコミュニケーション機器の導入、大会での技術活用に取り組んでいる。
 - ・ 世界の人々が出会うでは③芸術文化に触れ、感じる④世界に東京の魅力をPR、を掲げ、アートプロジェクト実施や芸術文化へのアクセシビリティ向上、競技会場等での東京の魅力発信、スタートアップの技術活用に取り組んでいる。
 - ・ こどもたちが夢をみるでは⑤2025 for キッズ⑥2025 with キッズ、を掲げ、子供向け陸上教室の開催や聴覚障害の理解・啓発、競技観戦への招待、大会のシンボル制作への参画に取り組んでいる。
 - ・ 未来へつなぐでは⑦みんなを守る、みんなの環境⑧共に生きる未来を創る、を掲げ、次世代型ソーラーセルやSAF（持続可能な航空燃料）の活用、ハンドブックを通した共生社会の発信、多様な人々との交流イベントに取り組んでいる。
 - ・ みんなで創るでは⑨Make it together 2025⑩知って、楽しんで、応援しよう！、を掲げ、多様な人々のボランティア参画やデフアスリートへの支援、機運醸成イベント、競技会場及びその周辺でのスポーツイベントに取り組んでいる。
- 東京都スポーツ推進本部は、上記の取組を基に、障害のあるなしにかかわらず、誰もが共にスポーツを楽しみ、互いの違いを認め、尊重しあう共生社会の実現に取り組んでいくとのことであった。

これら東京都スポーツ推進本部におけるデフリンピック開催に当たっての取組は、本県のデフリンピック・パラスポーツ推進に係る今後の委員会調査をする上で、参考となった。